

リトルアーティスト 絵画コンクール

三州岡崎葵市民
東京芸術大学名誉教授

中根 寛 氏



教育随想

本年二月、おかざき世界子ども美術博物館と朝日新聞社が主催する「リトルアーティスト絵画コンクール」が十四回目を迎える。

愛知、三重、岐阜、静岡の各県から一万五千を超える作品が集まる。東海地方の絵画教育に強い影響を与える大きな存在となっている。初回からその審査に参加させていたで、毎回子供の絵の魅力に打たれ楽しみも深い、入選作品の展示面積が少なく、厳しい選択になる苦しみも強い。又、「子供の絵はどう見たらよいか」という命題が常に頭に浮かび、幼児、児童の美術教育の専門家の審査員の方々のご意見を参考に、画家としての自分の判断を確かめながらの慎重な作業である。

子供の絵の魅力は豊かな思いを与えられる貴重なものであるが、多くは子供の成長に伴い、その輝きを失っていくのも事実である。応募作品にも高学年になる程魅力的な作品が少なくなる傾向を示している。

子供が絵から離れていく理由は数多くあると思うが、ここに指導の必要を感じる。子供の絵を指導することとは大変難しい。指導者の押しつける考えや形式が自発的な発展を阻害している場合も多い。成長に応じ、生まれながらに持っている造形感覚に技術を込み込ませていくことが出来ないかと思う。

美しさは、身近な自然の中にある。そして、人間も自然の一部である。大きく複雑な自然の中に、美しさの



(なかね ひろし)



平成14年1月1日

1月号

発行・編集
岡崎市教育委員会

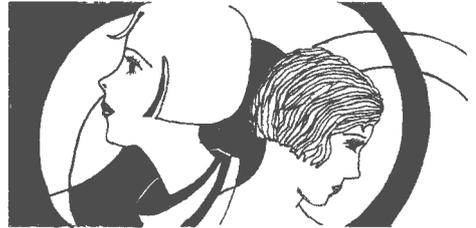
今月の紙面

教育随想	1
三州岡崎葵市民 東京芸術大学名誉教授 中根 寛氏	
この人に聞く	2
稲垣 鉄夫氏	
羅針盤	2
矢作中学校長 二村 邦彦	
ふれあい	3
竜谷小 平松みゆき 東海中 鈴木 優	
特集	4
温故知新 伝統芸能	
お知らせ	6
フォト・ヒストリー	8
教育文化賞授賞式(昭和49年)	
この本を	8

撰理を見つめるには、指導者に少々の工夫が必要である。

美術に限らず、どんな方向に進むにしても、これは、重要な学習と思う。今回はどんな作品にめぐり合うことか楽しみである。

ふるさとシリーズ この人に聞く



広がり 緑の輪

稲垣 鉄夫 氏

フィリピンで十年間にわたって植林活動をしていらつしやる稲垣さんにお話を伺った。

稲垣さんは市内の小学校や市役所に長年勤務され、現在は岡崎市の嘱託校務員として岩津中に勤務されている。

植林活動に参加するきっかけについてお聞きした。

「オイスカの一員である遠縁の者に誘われて、軽い気持ちでフィリピンに行ったのは十年前でした。当時

現地はちょうど日本の戦後と同じような状況で、非常に貧しく、学校に行かないで働いている子供が大勢いました。自分の幼いころの姿と重なり、この子供たちのために何かできないかと思ったのが最初です。」

稲垣さんの所属するオイスカは、途上国の産業開発や人づくり協力、環境保全を推進する財団で、四十年以上さまざまな活動を展開し、国際的にも広く知られている。

フィリピンのネグロス島はかつては沖合五百メートル以上マングローブの林が続いていた。しかし、紙の原料として大量に切り出されたため、海岸線が浸食され、荒れ果てていた。その海に仲間五、六人とともに、



毎年一万本ものマングローブを手作業で植えている。海の中なので、干潮のわずかの時間を利用して植えるという大変な作業だ。しかも、渡航費用はすべて自前である。家族の理解があったからこそ、十年間も続けられたと話された。

「言葉は通じなくても、笑顔いっぱいの子供や人なつっこい若者に会えるのが楽しみです。また、自分の植えた木が毎年育っていく様子を見ると、次もやろうという気持ちになります。今は海だけでなく、山や学校にも現地の子供たちと一緒に木を植えているんです。」

子供と植物が大好きと笑顔で語る稲垣さん。この十年間の植林の様子や現地の人たちとの交流を写したアルバムはかけがえない宝物である。かつて、壊滅状態だったマングローブの林はみごとによみがえった。稲垣さんたちが始めた植林活動は、今、緑の輪となつてフィリピン各地に広がりつつある。

氏名 いながき てつお
生年月日 昭和十三年十一月二十五日
住所 豊田市中郷町郷西四十六



体験活動を重視した進路指導

矢作中学校長
二村 邦彦

「保育士って大変だな、ああ疲れた」「お客様に大きな声であいさつをしなければいけないんだよ」「思っていたよりつらい仕事だった」。これは十月に行つた二年生の職場体験学習を終えてきた生徒たちのつぶやきである。

本校では、一年生で夏休みに身近な人の職場を見学し、仕事に取り組む姿や考え方を知るとともに、職業に対する興味・関心を高める学習をする。二年生では、職業の社会的な意義や尊さを学ぶために、二日間にわたつて校区を中心にした職場体験を実施する。三年生では、修学旅行先で、地元にはない職場や大企業を訪問し、職業に就くまでの道筋や心構えを学ぶ。その後、高校体験入学、社会人に聞く会、高校生に聞く会と

笑顔が広がる

竜谷小 平松みゆき

毎月二回、四年生の子供たちと老人ホームへ向かい、折り紙教室とフラワーアレンジメントの教室に参加する。

スタートは、A子と私の二人だけのボランティア活動だった。総合的な学習の時間で「お年寄りを大切に」グループのA子は、老人ホームの人たちにハッピーになってもらうための作戦を考えていた。何をすればいいのか悩んでいた彼女は、とにかくホームに行ってみようと言い出した。最初は私と二人で出かけることにした。



この日はフラワーアレンジメント。かごに花を入れることさえままならない方が多い。手伝おうとした私の手を一人のおばあさんが止めた。「この子にやってもらうかい。」顔を寄

せたおばあちゃんのA子を見る目が細くなり、口元に笑みが広がった。彼女の存在がおばあちゃんを元氣にしたのだと感じた。帰り道、笑顔で話しかけてきた。

「おばあちゃんたち、ハッピーになつてくれたかなあ。ねえ、先生。クラスのみんなまで来ようよ。」

A子の思いから始まった老人ホームの訪問。ホームの方々や子供たちの笑顔が広がって、ハッピーなひと時である。



心の交流

東海中 鈴木 優

「正直に言うと僕は障害のある人を気持ち悪いと思っていた。」

A男の作文を私が目にしたのは、岡崎養護学校との二度目の交流活動を一週間後に控えた日のことだった。今回は養護学校の生徒を東海中学校に招いて楽しんでもらうことがねらいである。普段前向きな発言が見られるA男だが、交流会の出し物

を話し合うとき、それが見られなかった。私は納得しつつも、何とかしなければと思った。道徳の時間、学級通信、STの時間など、ことあるごとに障害について話題にした。

しかし、A男の心を本当に揺さぶったのは、一通の手紙だったらしい。



養護学校の生徒から届いた手紙には、「A男君、一回目のときはあまりしゃべれなかったのですが、今回は楽しみにしています」と書いてあった。

二回目の交流の当日、チーム対抗風船バレーで盛り上がるクラスの中で、養護学校の生徒の手を握り、一緒にレシーブするA男の姿があった。A男はクラスの人々よりも一足早く、「心の交流」をしたようである。

学びが続く。さらに、自己の希望する職場選びから、電話での交渉、職場へ出向いての依頼等、すべて生徒自らが行う。

このように、三年間にわたり計画的に、体験的な活動を重視した進路の学習を、総合的な学習の時間で行っている。

中学生時代は、人生のうちで心身ともに著しく成長する時期なので、将来の夢や目標を持たせることが特に大切である。直接的な体験によって得られる情報は、生徒たちにとって、より現実的で具体的なものとなる。

現在では、卒業生のほとんどが高等学校、専門学校等へ進む。しかし、ただ単に進学するのではなく、自分の就きたい職業を見据えた進路決定が大切である。愛知県では、一年間に約八百名もの生徒が高校を中途退学する。生徒たちが目標を持ち、毎日を意欲的に過ごし、将来に向けて夢や理想を実現するため、生き方と進路の学習は、おろそかにすることはできない。一人一人の生徒の特性を引き出し、伸ばしていくと同時に、生徒の体験学習を多く取り入れた指導が、今後一層重要なことであろう。

伝統芸能

温故知新



落語 (城南小)

伝統芸能を教育活動の一環として行う学校が増えている。平成十三年十一月現在の調査では、市内小中学校六十校のうち十八校が伝統芸能に取り組んでいる。二十年以上も続けている学校がある一方、七校が移行措置期間に取組を始めている。さらに、これとは別に三校が導入を検討中である。

和楽器演奏、地域伝統芸能、落語などをクラブ活動、部活動、総合的な学習の時間、選択教科で取り入れるなど、各校の工夫が見られる。また、どの学校も学習発表会や文化祭、敬老会などで発表の場を設けている。さらに、学校によっては地域祭礼への参加や老人保健施設の慰問、他地区の学校との交流を実施している。

実践校からは、子供たちの生き生きと活動する姿や地域を見つめ直す心の芽生え、子供たちの地域への広がりや指導者との交流など、子供たちの成長や地域に開かれていく学校の様子が報告されている。

平成十三年十一月十八日には、「第十回岡崎市子ども伝統芸能祭」がせきれいホールで開催され、学校参加と個人参加を合わせて一八一名（園児九名を含む）もの子供たちが、日ごろの練習成果を披露した。

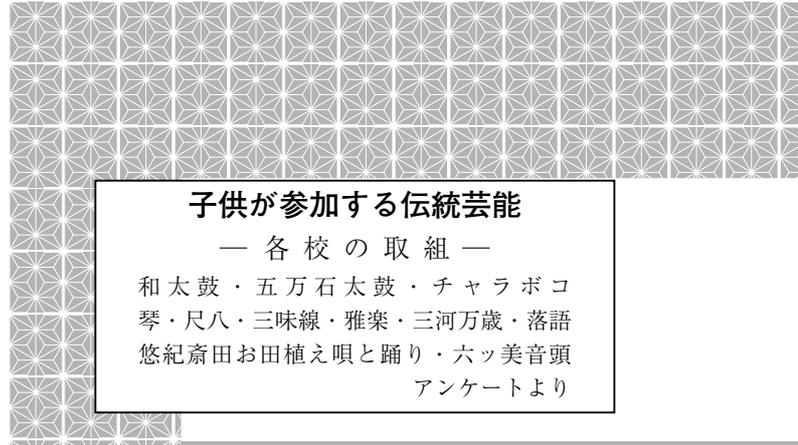
来年度から完全実施される新学習指導要領では、音楽の授業において和楽器の導入が図られることもあり、ますます地域の歴史や伝統に触れる機会が増えるに違いない。



雅楽 (矢作北小)



尺八 (竜海中)



子供が参加する伝統芸能

— 各校の取組 —

和太鼓・五万石太鼓・チャラボコ
 琴・尺八・三味線・雅楽・三河万歳・落語
 悠紀齋田お田植え唄と踊り・六ッ美音頭
 アンケートより



三味線 (北中)



悠紀齋田お田植え唄 (六ッ美南部小)



琴 (福岡中)



六ッ美音頭 (六ッ美北部小)



和太鼓 (大樹寺小)



三河万歳 (細川小)

お知らせ

● 教育最新情報

○ I T革命の進展状況

今年度六月に実施した情報教育実態調査によると、岡崎市内小中学校で「コンピュータを操作できる」と回答した教員は約九十四%（全国は約七十九%）で、「コンピュータで指導できる」と回答した教員は約五十九%（全国は約四十三%）であった。いずれも高水準であり、岡崎市の教員が前向きに教育の情報化に対応していることを示していた。

平成十二年度からの六年間で実施される「ミレニアムプロジェクト『教育の情報化』」の開始により、学校教育の情報化は大きな転機を迎えている。今、教育におけるI T革命が起こっているわけである。



コンピュータやインターネットの学校教育での活用に関して、我が国は諸外国とは違った特異な傾向があった。つまり、コンピュータ整備がコンピュータ教室に限られていたこともあって、コンピュータやインターネットを特別なものとして扱う傾向があった。この「ミレニアムプロジェクト『教育の情報化』」では、「これまでも行われてきた『各教科』の授業を、コンピュータやインターネットを学習の『道具』として活用することにより、すべての子供たちにとって『分かりやすい』ものにする」という、諸外国と共通する目標を掲げている。

十月三十日に行われた藤川小学校の研究発表会の公開授業では、すべての学年・学級の多様な教科で、コンピュータやインターネットが学びのねらいを達成する道具として利用されていた。教科学習の当たり前の道具として子供が使っている様子は、新しい授業スタイルが着実に定着しつつあることを示していた。

各学校においても、「ミレニアムプロジェクト『教育の情報化』」の趣旨や内容を正しく理解してI T革命に対応していくことが重要になっている。

岡崎市では教育の情報化に対応するために、岡崎教育ネットワークの充実を図りながら、時代に対応した小学校のコンピュータの更新や中学校の校内LAN環境の整備などを進めていく予定である。

加えて、岡崎市では国のI Tに関連する事業の研究指定を受け、多くの先駆的な取組を進めてもいる。今年度は新たに、小学校二十八校が、文部科学省と総務省の連携事業である「次世代I Tを活用した未来型教育研究開発事業」の指定を受けた。教育研究所



▲図書室でのインターネット利用（藤川小）

の六名分室を地域センターとして、指定された小学校を光ファイバー網で接続し、教育ネットワークのより効率的な運用を図っていくようとしている。

新学習指導要領の完全実施を目前に控え、教育は大きく変わろうとしている。まさに社会の変化に対応する教育が求められているわけである。ことに、二十一世紀を担う子供たちが、I T革命の荒波を乗り越えていくという意味でも、教育における「情報化」は重要なキーワードになる。今、子供にとって、新しい学習の用途を自らの学びを深める有効な道具の一つとして活用できる力が不可欠である。

● 少年自然の家だより

○ 第一回須淵の森ファミリーウォーク

十月二十七日（土）、全国ファミリーウォークデーに賛して、自然の家の周辺五キロを歩く会を実施した。初めての試みで、参加者は十四家族四十一名と少なかったが、変化に富んだコースとスタンプラリーの形態はとても好評であった。高齢のご夫婦や幼児同伴の家族も幾組があった。ゴール後の落葉スキーにも歓声を上げてみえた。

地図やスタンプ等は、今後各学校の「山の学習」などで活用してもらえと思う。



▲須淵の森ファミリーウォーク

●第二十九回教育文化賞



▲第29回教育文化賞授賞式 (平成13年11月17日・せぎれいホール)

(個人)

◇鈴木一生氏

人づくりに生かす通信の実践活動が二十四年に及んでいる。学級通信、教科通信、部活通信を新しい視点と方法で発行してきた。OC通信等教育活動への成果は大きい。

◇近藤恵子氏

岡崎高校のコーラス部の顧問として着実な実績を残す。平成十二年には合唱オリンピックで世界一となる。地域音楽文化の振興にも寄与する。

◇愛知教育大学名誉教授

鈴木八郎氏・柴田録治氏

昭和四十五年以降「岡崎市算数・数学教育研究部会」の

常任講師として指導・助言を行った。算数指導に役立つ刊行物の指導などにも携り、多大な貢献をした。

(団体)

◇岡崎野鳥の会

老若男女を問わず参加できる月例会の探鳥会を中心に環境意識の高揚と啓発に努めた。自費出版した「岡崎公園の野鳥116」や「岡崎の探鳥池ガイド」などを市内幼稚園・小学校などへ寄贈した。

◇岡崎グラウンドポップスオーケストラ

日本唯一のアマチュアポップス系オーケストラとして結成され、長きに渡り演奏活動を続け、全国的にも活躍する。



▲記念公演 (岡崎女性コーラス)

●表彰

◆第四十三回岡崎市中学生

英語スピーチフェスティバル入賞(○印 西三河大会入賞)

竜海中三年 川口 敦子

○附属中三年 中根 明子

○河合中三年 粟生彩有里

○河合中二年 川澄 晶子

南 中二年 小椋 淳平

城北中三年 原 知代

城北中二年 谷 香保里

美川中三年 柴田 尚人

新香山中三年 加藤 愛

◆明るい選挙啓発ポスター

優秀作品

竜美丘小六年 見並 克俊

◆平成十三年健康フェア

習字の部 市長賞

連尺小六年 三後 祐佳

●描画の部 市長賞

秦梨小一年 安藤 竜太

●ポスターの部 市長賞

六ッ美北中二年 鈴木 理加

◆第十八回明るい社会づくり

実践体験文

●小学生の部

市長賞 秦梨小六年 川澄 彩

委員長賞 三島小五年 石原 千穂

●中学生の部

委員長賞 六ッ美北中 原口 生衣

◆平成十三年度CBCこども

音楽コンクール

●東海地区大会 優秀賞

合唱部門 大樹寺小学校

合唱部門 矢作南小学校

管楽部門 新香山中学校

管楽部門 竜美丘小学校

岩津中学校

矢作北中学校

葵 中学校

重奏部門 岩津中学校

●中部日本決勝大会 最優秀賞

合唱部門 六ッ美北中学校

重唱部門 六ッ美北中学校

管楽部門 岩津中学校

◆第五十一回「社会を明るく

する運動」作文コンテスト

●県実施委員会委員長賞

常磐中三年 長谷川 恵

◆第二十一回全国中学生人権

作文コンテスト愛知県大会

●優秀賞

矢作中一年 白井 陽介

◆平成十三年度愛知県健康教育推進学校

●小学校

特別優秀校 北野小学校

●中学校

特別優秀校 北中学校



▲第54回全日本合唱コンクール全国コンクール (六ッ美北中)

◆第一回ソニー子ども科学教育プログラム

●入選プロジェクト校

大樹寺小学校

緑丘小学校

●奨励プロジェクト校

六ッ美西部小学校

◆第五十一回西三河中学校駅伝大会

●男子

優勝 竜海中学校

二位 東海中学校

●女子

優勝 東海中学校

◆第五十回県中学校駅伝大会

●男子

二位 東海中学校

三位 竜海中学校

●女子

三位 東海中学校

・カ
ツ
ト

六ッ美中 青木貴之



教育文化賞授賞式 (昭和49年)



写真提供 矢作幼稚園

昭和四十八年より始まった教育文化賞は、本年度で二十九回を迎えた。岡崎の教育の文化振興に寄与した個人・団体に授与されている。一貫して、継続的な努力の累積を評価してきた。

岡崎竜城LC様には、発足以来、永く助成していただいている。

矢作幼稚園は、昭和四十九年に受賞となった。写真は、岡崎信用金庫中央支店での授賞式である。幼児の自発性に根ざす保育を推進し、園児一人一人を見つめた五年間の教師の記録『たんぼの詩』を編集した功績が、認められたものである。

この本を

- * 台所の詩人たち 岩阪 恵子 ￥1900
岩波書店
- * いじめ14歳のMessage 林 慧樹 ￥950
小学館
- * 日本・日本語・日本人 大野 晋 他 ￥1100
新潮社
- * いのちの対話 瀬戸内寂聴 他 ￥800
光文社

* きれいな敬語、羞かしい敬語

草柳 大蔵 ￥1400
グラフ社

美しい言葉は、人の心を穏やかに豊かにもする。この美しい言葉の使い方として「敬語」の使い方がある。だが、この使い方がむずかしく、近ごろでは、間違っ使用が増えてきた。この現象を著者は、「核家族化の進行で敬語を教わることが少なくなったこと、横並び人間関係では、敬語が必要でないこと」などをあげている。日本社会の変化と平行して「敬語」の社会的生態系が変わったことも指摘している。言葉は人なり。素敵な言葉を心がけたい。

お子さまの名前は「愛子」。内親王の誕生に日本中がわき立った。名前と称号は「壘子」からの出典である。「人を愛し、愛され、人を敬い、敬われる」ことを願って命名されたという。新世紀の幕開けは暗い話題が多かった。今年こそ敬愛の心を子供たちにも伝えたい。

シオ スア

淑氣に満ちた正月の雰囲気は心地良い。目に映るすべてのものに新鮮さを感じながら、己を律する新たな誓いを立てる。さて、子供たちは新年にどんな抱負を持ったのであろうか。始業式、久々に対面する子供たちを包む空気が、淑氣に溢れ、いつもより澄んでいるような気がする。

足取りも軽く子供たちが走り出す。耐寒駆け足の時期がやってきた。白い息、赤いほほ。そして、走り終わった後の満足そうな顔。寒さがあるからこそ、暖かさを味わうことができる。苦しいからこそ、喜びも大きい。今年もこの子らとともに歩んでいこう。

裾さばきも鮮やかに舞台を舞う子供たち。引き締まったその表情からは、この舞台にかける意気込みを感じる。

市伝統芸能祭は今年度も盛大に行われた。新世紀に伝統文化を伝える若き継承者たちには、技とともに心も受け継がれていく。